

キャリアパス支援講演会 実施報告書

【演題】 実務実習前の学生さんに伝えたいこと ～アメリカの医療と大学院生活を体験して～

【講師】 堺 千紘 氏 (Boston College・Lynch School of Education and Human Development)

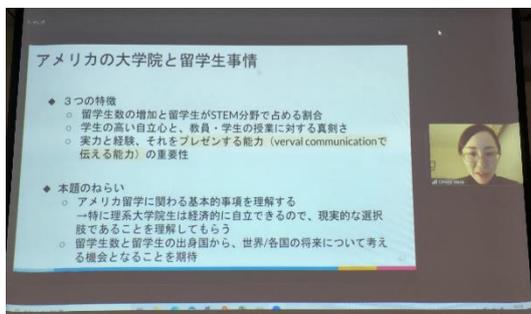
【日時】 令和5年1月24日(火) 9:00～10:30

【場所】 Zoom 利用によるオンライン開催

【参加者数】 139名(岐阜薬科大学136名、岐阜大学2名、岐阜女子大学1名)

講師は岐阜薬科大学薬局薬学研究室助教に従事した後、結婚を機に米国に移住し、現在は大学院において統計学・評価学を学んでいる。今回は患者・学生・研究者と様々な立場で経験したことをもとに、米国の医療システムおよび大学院進学と留学について講演いただいた。

まず、米国の病院と薬局の特徴について①受けられる医療とその自己負担額は加入している保険に全て依存していること、②システムのデジタル化と分業化が徹底していること、③患者の自己責任が非常に大きいこと、を挙げられた。国民皆保険という日本では考えにくい、莫大な医療費により自己破産が社会問題として起こることなど、米国の医療事情を知ることが、自国と比較して背景や文化や国民性など様々な問題とともに考えてみることのきっかけになり、将来に向けて今の行動が変化する機会を得られたことになる。即時効果としては臨床系論文の理解度が高まること期待される。また、講師自身の体験をもとに、保険加入から医療機関受診とその後まで一連の流れを紹介していただき、具体的にイメージすることができた。



紹介していただき、具体的にイメージすることができた。

デジタル化が徹底され、医療保険会社は加入者の医療情報を全て把握していることになる。これを利用した後ろ向き臨床研究が多く行われているようである。医療はビジネスであり、保険会社の負担額減少の目的もあるだろう。

講師は大学院に留学するために渡米したわけではないため留学の心得はないが、TOEFLを勉強しておくこと、日常会話程度ではなく丁寧でフォーマルな英語の言葉遣いを学ぶことが重要であると言われた。プレゼンする能力も重要である。授業料や生活費など経費の問題も解決方法はたくさんあり、さらにPh.D. コースは学費免除制度の経済支援がある大学院もあるが、入学することは容易ではないようである。学部と大学院とでは留学の難易度や経費など違ってくることも言及された。

チャット利用ではあつたが多くの質問があり、積極的に受講した姿が見られた。薬学部を卒業した後も様々な道があることを示していただいた。実務実習を控えた学生にとっては、これからの大学生活での学びかたやまたは進路を考えるうえで有意義な機会であった。また、広い視野をもち物事を捉えて主体的に行動することは研究活動にも大きく影響することも示していただいた。